
無～消えない想い～

月刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無く消えない想い

【Nコード】

N9018F

【作者名】

月刃

【あらすじ】

友人のお見舞いのため都内の病院へ向かう途中に必ず通る大きな公園。花田和俊はそこで毎日のように、ある女性を見かける。その女性はいつも決まった場所にいて、誰かを待っているかのようだった……。

謎の女性

いつもの講義が終わり、帰り支度を手早くする。

そして、その場から立ち上がると、次にカバンを肩に背負う。

花田和俊は、さっそうと校門をくぐり、都内の病院へと向かった。

大通りの横断歩道を三回渡ると公園が見えてきた。

志間第二公園はこの町では一番広い公園で、たくさんの市民が利用していた。

犬と一緒に散歩している人がいたり、ランニングをしている人がいたり、ベンチでくつろいでいる人もいれば、そこら周辺を、ただやみくもに走り回っている子供たちもいる。

しかし、白い制服を着た看護婦さんに車椅子を押してもらっている市民も少なくはなかった。

この公園の近くには、花田和俊の今の目的地でもある志間病院があった。

そのため、外出の許可を得た入院患者が看護婦に連れられて、ここにやってくるわけである。

彼らの顔は、他の人と比べると一段と輝いて見えた。

長い闘病生活で、毎日を病院の中で過ごしていた彼らにとって、この公園はとても心癒される場所だったのだろう。

そんな優しい雰囲気を漂わすこの公園を抜けようとした時だった。

「シャリーン」

どこからともなく鈴の音が聞こえてきた。

花田和俊はその方を振り向く。

その音は噴水の近くにあるベンチから聞こえてきた。

そのベンチに一人の女性が腰を下ろしていた。

その女性は茶色い季節はずれのコートを着ていて、後ろ髪をゴムで

留めていた。

いわば髪型はポニーテールだった。

その留めていたゴムには、小さな鈴が二個取り付けられており、それが発信源だったということはすでに承知のうえだった。

その女性は今日初めて見たということではなかった。

花田和俊が、病院に通い始めてからずっと、その女性はいつもそのベンチに腰を下ろしていた。

毎日、病院に通っていることではないので強く断定はできないのだが、その女性の姿を見なかったことは一度もないほどだった。

彼女はいつもあの場所で行っているのだろうか？

客観的に見ると、噴水の前にあるベンチに座っているということから

『誰かを待っている』

ということが連想される。

花田和俊が病院に通い始めてから、かれこれ一、二週間が過ぎようとしている。

となると彼女の待ち人はその一、二週間の間、全くその場に姿を現していないということになる。

それにも関わらず、その女性はいつもその噴水前のベンチに座っていた。

その光景を見て若干不気味さを感じつつも、花田和俊は病院へと入っていた。

謎の女性（後書き）

初めての小説投稿でなにかしらとても不安でイッパイです。でも小説はホントに読むのも書くのも好きなので楽しく書き上げることができました。少しでも自分の思い描く世界をこの小説を通して広げられていったらいいなと思っています。

奇

院内はこの季節にも関わらず、冷房が全く効いていなかったの少しずつ体が熱くなり、生温かい汗が自分の首筋を流れ落ちるのを感じた。

それを腕で拭い、つつ受付前を通り、さらに奥へ進んだところにある少し暗い階段を昇る。

二階のナースステーションを前を通り過ぎ、二〇一号室の病室前へとやってきた。

そして扉を開け中に入ると、そこにはベッドの上に横たわる遠藤修造の姿があった。

「毎度毎度、すまねえな」

「ホントだよ。お前があの時、急にお腹が痛いとか言って病院に通いだしてから、ずっとコレだよ」

遠藤修造とは小学生のころからずっと幼馴染で昔から仲が良かった。そんな彼は虫垂炎でこの病院に入院していた。

それは今から二週間前の出来事だった。

講義が終わり、帰り支度をする和俊。

教室を抜け出し向かった先は、同じ階にある少し大きな図書室。

ここで遠藤修造と勉強会を開くことにしていた。

和俊が扉を開けて周辺を見渡すと彼はすでに席に座ってシャーペンを片手に勉強を始めていた。

そのすぐ隣の席が空いていたので、彼のそばへ駆け寄り、目で相槌を打ったあとにその席に座った。

テキストを開き、問題に取り掛かってから数分が経った時だった。ふと彼の顔を見たときだった。

いつもの彼の元気な顔とは打って変わって、真っ青になっていた。

「おい、修造。大丈夫か？なんか顔色が悪いぞ」

「・・・俺なんだかさつきから腹の具合が悪いみたいだ・・・」

腹痛にしては今にも倒れそうぐらいに見えたので、和俊は保健室へと連れて行った。

その翌日、修造は盲腸で都内の病院で手術を受け、入院。そして今に至るといいうわけである。

「こんな病院とか言うなよ。それでも都内では一番有名な病院なんだぜ、ここ」

「かもしれないけどさ・・・」

「・・・ああ、まだ・・・おふくろさんのことが？」

「・・・まあ、そんなところだ」

「そうか・・・なんか、悪いな」

「気にするなつて、もう昔の話さ」

そう言つて花田和俊は近くにあつた椅子に腰を下ろした。

そしてテーブルの上に置いてあつた新聞に手を伸ばした。

相変わらず記事や見出しには、昨日も見たような同じネタが使用されていたため読む気にはならなかった。

仕方なくその隣に置かれていた修造の好物であるミカンをむいて食べることにした。

「で、どうなのよ？調子のほうは」

「いやぁ、だいぶマシになったと思うんだけどさ・・・」

「・・・何日？」

「あと約一週間つてとこだ」

「そうか」

和俊がふと壁に掛けられていたカレンダーに目をやる。

今日は七月二十二日。

修造が盲腸になり手術をしたのがちょうど十四日前の七月七日

「七夕」だった。

「そつだ。なあ、知ってるか？」

突然、修造が口を開いたので、和俊は不意をつかれたかのように少

し驚き、耳をそちらに傾けた。

「何を？」

「生神町に派遣された4人の警察官が神隠しにあった、って話さ」
少し声を震わせながら修造は話した。

その話は、和俊も以前二ユースで聞いたことがあった。

先程まで手にしていた新聞にも、確か小さな記事としてだが掲載されていた。

生神町は、ここ志間町から少し離れたところにあるのだが、その町には昔から奇妙な事件が多発していた。

しかし、それらの真相は今でも解明されておらず、謎に包まれたままである。

今回の件もまた、その内の1つとなってしまうたであろう。

「ああ、知ってるさ。それがどうしたんだよ？」

「どうしたじゃねえよ。千春ちゃんのこと、心配じゃないのかよ？」
修造の言葉に和俊はあることを思い出した。

千春のことである。

千春は、2日前に親しい友人たちと一緒に生神町へ3泊4日の観光旅行へ出掛けていたのだった。

「別に大丈夫だって。神隠しなんざ、どうせどこぞのマニアが流した噂だよ。その警官だって…すぐ見つかるさ」

「だといいいけどさ…。でも、あそこは何かとブツソウだよ。霧も多いし…」

それから会話が一旦止まり、今まで食べていたミカンもただの皮だけとなった。

時計の針はいつの間にか3の刻を指していた。

「まあ、メールぐらいはしたら？彼氏としてさ」

「最後のは余計に聞こえるけどな…まあ、そうするよ。お前も早く治せよ」

「分かってるって」

そう言って和俊は、病室をあとにした。

そして、携帯電話を取り出し、千春にメールを送ろうとした時、突然、自分の身体に小さな衝撃がはしった。
見るとそこには、小さな少年がその場で立ちすくんでいた。

奇（後書き）

更新が遅れてしまいました・・・

やっぱり小説を書くって難しいですね。

でも、物語を考えるのはホントに楽しくてオモシロいことなんだな
と、今回、続編を書いてみて、改めてそう思いました。

待ち人

その少年は、今流行りのキャラクター柄のパジャマを着ており、その胸元には鍵のような形をした首飾りが光っていた。

少年は、和俊を下から一目見ると、何事もなかったかのように、走って行ってしまった。

「何なんだよ、一体…？」

謝りもせずその場を去ったことに少し苛立ちを抱きつつ、和俊は千春にメールを送った。

元気か？

あんま変なところには行くなよ。

何かあったら、いつでも連絡してくれ。

送信完了の表示が出て携帯電話を折り畳む。

そして、病院をあとにしようとした時、なにやら雲行きが怪しくなってきた。

小雨が降ってきたようだ。

やれやれと、鞆の中から折り畳み傘を取り出す。

帰りも公園の中を通るのだが、小雨が降ってきたせいか、先程と比べると人数がだいぶ減っていた。

しかしそんな中でも、所々に色とりどりの景色が見られた。

小雨の降る中、少し寂しくなった公園の中をゆっくりと歩く。

そして、噴水の近くを通りかかった時だった。

「シャリーン」

また、あの音が聞こえた。

その方を見ると、やはり、あの女の人がベンチに座っていた。

傘も差さずに。

さすがに、和俊は心配になってきたので、思い切って、その女性の元へと近寄って行った。

近くで見ると、まるで小雨は彼女のところにだけ降っていないかのように、あまり衣服は濡れていないかのように見えた。

「あのー、すみませんが…」

和俊が話しかけると、その女性は静かに顔を上げた。

何やらもの悲しそうな表情を浮かべながら。

「雨降ってきたから、どこか屋根のあるところに行ったほうがいいんじゃないですか？」和俊が話すと女性は、何かを思い出したかのような表情を浮かべ、口を開いた。

「…新…一…？」

「えっ？」

微かに聞こえた彼女が言ったのは『新一』という、誰かしらの名前だった。

急な話の展開だったので、和俊は戸惑いを隠せなかった。

しかし、女性は話を続ける。

「やっぱり…帰ってきてくれた…」

何を言っているのか全く分からなかったが、唯一つ、この女性は自分をその『新一』という人物だと思い、人違いをしているということが分かった。

「あの…、たぶん人違いだと思うんですけども…」

和俊が言うと、その女性は黙りこんでしまった。

「あの…、とりあえず移動しましょう…ね？」

和俊は、その女性をベンチから立たせ、近くにあった休憩小屋へとやってきた。

連れてきたはいいものの、初対面の彼女に一体なんと話しかけたらいいのか分からず、気まずい空気がその小屋のを包み込む。

「雨…」

突然、女性が口を開いた。

「雨は…心にしみる…。降り注ぐ雨の雫は誰かの涙のようで…。と
もに鳴り響く雷鳴は怒りのようで…。まるで、ある人の心情そのも
のを表しているかのよう…」

降りやまない雨を眺めながら、女性はなにやら呟いた。
どこか寂しげに語る彼女を、ただ和俊は見つめていた。

しかし、ただボーっとしてはダメだと思い、日頃の疑問を彼女
に尋ねることにした。

「あの…。何故、そこまでして、その…新一っていう方を待ってい
るんですか？」

女性は静かに口を開ける。

「新一は…必ず帰ってくるって言ってた。…だから、いつも決まっ
た場所にいないと新一が困るから…」

言い分は分かったが、少し変わっているなあと和俊は思った。

恐らく、この女性と新一という人は恋愛関係にある。

決まった場所で想い人を待つ。

まるで、とある恋愛ドラマのシチュエーションのようだった。

「あなたは誰なんですか？」

思いふける和俊に今度は彼女が話を振ってきた。

確かに、お互い初対面にも関わらず、会話を続けていくのは、何か
とマナーに反する。

「あつ、スイマセン。紹介が遅れてしまいましたね。和俊って言い
ます。花田和俊。あなたは？」

「サキ…」

「サキさん…ですね？」

女性は静かに頷いた。

それから、会話が途切れ、再び沈黙状態となった。

「もう…戻らなきゃ」

サキは、そう言う立ち上がり、小屋から出ようとした。

「ちょっと、待ってください。雨降ってるんですよ？また体が濡れ
てしまいますよ」

「でも・・・いかなきゃ」

和俊はサキをここで雨宿りするよう説得するが、どうも、先ほどの噴水前のベンチに向かいたがっているようだった。

「じゃあ、コレ・・・持って行ってください」

和俊は、カバンの中からもう1つの折り畳み傘を取り出し、サキに差し出した。

「普段から傘は予備として、2つ持ってるんですよ。コレ、貰い物なんで良かったら使ってください」

「でも・・・」

「使ってください。俺毎日とはいえないけど頻繁にこの公園を通るんで、その時に返してくださってもいいし、別に貰ってくれても構いませんから」

和俊はサキに傘を使うよう、念を押した。

初めは躊躇ったが、そのうち、サキはその折り畳み傘にゆっくりと手を伸ばした。

「...ありがとうございます。では...」

傘を受け取ると、サキは和俊に一礼し、少し暗い色をした傘を開き雨の中へと静かに消えていった。

その様子を最後まで見送った和俊は、なにやら身体中の力が抜けたような気分になり、椅子に深く腰掛けた。

「不思議な人だったなあ」

独り言を自然と発してしまっただが、和俊には今の全ての環境下において、最早、それはどうでもいいことだった。

そして、一息ついたところで、和俊も立ち上がり、小屋をあとにした。

公園を抜けると、また交差点に歩みを止められた。

すっかり暗くなった夜道の中、信号が青になるのを待つ。

頭の上では、ポツポツとリズムカルに傘の上を泳ぐ雨の音だけが響き渡る。

少し肌寒く、どこか切なく、町を染めゆく。

見慣れた町も、この雨によって、どこか違う場所に見えてくるようだった。

「お兄ちゃん」

はっと思い、和俊はその方を振り向くと、そこには、赤い小さな傘を指した女の子がいた。

「信号、青だよ？」

「えっ？…あ」

いつの間にか、信号は青色になっていた。

「一緒に渡る」

女の子は、笑顔で和俊に言った。

「すいません、どうも…」

すると今度は、その女の子の隣にいた母親が、話しかけてきた。

「いつものクセなんです。すいません…」

母親は、もう一度謝罪すると、その女の子の手を優しく引く張り、先に横断歩道を渡って行った。

「バイバイ、お兄ちゃん」

横断歩道を渡り終わり、向こう側でもう一度女の子は振り向き、和俊に向かって、その小さな手を振った。

和俊も、笑顔で彼女に向かって手を振った。今日は、なにやら物思いにふける長い1日だったように思った。

待ち人（後書き）

後半部、私の思う「雨」というものを言葉に表してみました。

主人公の心情と重ねつつ、表現すること大切なのかなと勝手に思いつつやってみました（笑）

あなたは「雨」に触れて何を感じますか？

噂

昨日の雨は、夜遅くまで降り続けていたが、今朝は、すっかり雲一つない、快晴の空模様だった。

全てのカーテンを勢いよく開けると、和俊は大きく深呼吸した。

そして、一息つくと、キッチンに行き、朝食を作ると、リビングに戻り、座布団の上にドシッと座る。

テレビをつけると、ニュースがやっていた。

経済界が不況の一途をたどるなど、全く日頃見ているのと同じ内容ばかりだった。

「全く…耳にタコだ」

と思いながら、葛シヤムが薄く塗られた食パンにガブリとかじりついていた。

全て片付いたあとに、ちょうど番組はニュースから天気予報に変わっていた。

今日は1日中晴れ、降水確率0パーセント。

思った通りだった。

そして、時計を確認すると長針の針は8の数字を指していた。

今日は講義はなし。

せっかくの1日だ。

何もせず、ただこうやってボートとしているのも何かともったいない。

「ピンポーン」

考えていた矢先だった。

インターホンの鳴る音が聞こえた。

ドアを開けると、そこには、半袖のカッターシャツに薄手のスラックスをはいた、長身で少し細身だが、かなり筋肉質な男が立っ

た。

「よお、和俊。今日暇か？」

「ああ、喜一か。うん。今日は講義がないんだ。ちょうど今、どうしようかなあって悩んでたところだ」

「そうか。なら…喫茶店にでもいかないか？」

「いいな。是非そうさせてもらうよ。ところで、その小さい鞆の中に入ってるのって…」

「…そうさ。例の代物だ」

喜一は、ニコニコしながら答えた。

和俊は、その意味を理解していたので、あえて詳しくは聞かなかった。

支度を整えたあとに、喜一とともに、喫茶店へと向かった。

歩きながら和俊は喜一に話しかけた。

「喜一は、今日は…」

「ああ、今日は休暇を貰ったんだ。親父が…さ、『お前、最近働き過ぎだから、少し息抜きしろ』って言うてさ、三日間の休暇をくれたんだよ」

「へえ。いい親父さんじゃないか」

「全く…、俺がいないと辛いのは分かってるくせに、意地だけは張りたがる…。困った男なんだよ、ホントに」

「お前の身体のことを心配してくれてるんだよ。察してやれよ、そこはさ」

「馬鹿。俺は…まだ若い。でも親父は…もう歳だ。逆に俺が心配するんだよ。俺に察してほしいくらいなんだよ」

そう言うて喜一は、頭をかいた。

相変わらず仲の良い親子だなと思いつつ、和俊は微笑んだ。

そうして、いつの間にか喫茶店『風の里』にやってきた。

ここは、昔、喜一と修造と一緒に学校帰りに寄り道した思い出の場所でもあった。

中に入ると、早速、心地のよい冷風が二人を出迎えた。

「いらつしやいませ。ご注文をどうぞ」

「えーっと、アイスコーヒーで。和俊は？」

「あつ、じゃあ俺もソレで」

「アイスコーヒーを二つですね。かしこまりました」

涼しい正装姿の青年は注文を聞くと、さっそうと二つのアイスコーヒーを運んできた。

「ごゆっくりどうぞ…」

トレイを両手に持ち、喜一は座る場所を確保する。

まだ、この店は開店したところなのか、あまり他の客は見られなかった。

「なあ、上に行かないか？ほら、あそこなら風通しもいいし」

「そうだな、行くか」

喜一の意見に和俊も賛成し、二階に上がった。

フロアの様子は一階とあまり変わらないが、この階にはバルコニーがあった。

そこは、ちょうど日陰になっていて、今の季節でも十分に涼しいのである。

「ここにするか」

「そうだな。涼しいし人もいないし、それに…」

「これをするには絶好の場所ってとこだよな」

そう言くと、喜一は鞆の中から小さなチェス版を取り出した。

そして、白黒の駒を所定の位置にセットし、ゲームスタート。

「こつやって、お前とチェスするのも久しぶりだ、な」

「そうだ、な」

和俊は白の駒を、喜一は黒の駒をそれぞれ動かし始める。

「…もう喧嘩を打ってくるか、喜一」

「ナイトは扱いやすいからな。早めに手を打っておくに限るさ」

「そうか、俺はビショップだな」

そして、お互い同等に駒の数が徐々に減っていく。

「ルークとナイトが一つに、クイーン、キング…あとはポーンが二

個か」

「和俊は…クイーン、キング、ビショップが二個、ポーンが一個か。今のところ俺が立場的に有利だな」

「まだ分らないさ。お前のクイーンを先に潰せば、立場逆転だ」

「チェスはここからが面白いんだよな」

そう言つて喜一は、アイスコーヒーを一口飲んだ。

和俊も気合いを入れる。

「ところで今日は、こうやってチェスをしにきただけか？喜一」

「ん？」

クイーンを動かそうとしていた喜一の手がピタリと止まった。

「お前のことだ。他に何か別の話があるんじゃないかと思つてさ」

喜一は、クイーンを元の位置に戻し、小さくため息をついた。

「…お前は相変わらず鋭いな。ああ、ちよつと氣になったことがあつてな」

「氣になったこと？」

「うん…志間高校のことなんだが」

「志間高校？俺たちが通つてたところじゃないか」

「ああ。お前、その学園に古くから伝わる…『白い翼伝説』つていうのを聞いたことはないか？」

「白い翼？何だよ、それ？さあ…聞いたことないなあ」

「そうか…」

「ちよ、何なんだよ？その…何か幸せを運んできそうな名の伝説つてやつは？」

「いや…むしろ逆だ」

「逆？」

「それは受け取つた者を不幸にする代物だ」

「不幸にさせる？」

「ああ、知らない間に下駄箱や、机の中などに入っていて、送り主は不明。そして『白い翼』を手にした者には必ず喜ばしくないことが起きる…俺が知つてるのは、それぐらいだ」

「へえー、そんな都市伝説みたいな噂があったのか…で、それがどうしたんだよ？」

「実際起こっているらしいぞ、今」

「えっ…」

「この前、店に来ていた後輩連中が口々に話しているのを聞いたんだよ。それが、気になってな…」

「まあ…でも所詮、それは誰かのイタズラにすぎないだろ？考えるほどじゃないって」

そう言うのと和俊は、クイーンを手に取り、動かした。

そのクイーンは、喜一のキングをチェックしていた。

「チェック。逃げ場はないから…エックメイトだな」

「くそっ、お前はこうやって話をしていても頭はフルに回転しているんだな」

「何事もココが肝心さ。その噂も、考え方しだいでは捉え方も変わってくるもんだよ」

和俊は人差し指を頭部に軽く突つつきながら話した。

「まあ…そうかもしれないけどな」

喜一は、残りあとわずかとなった、アイスコーヒーをストローでグルグルかき回しながら言った。

そのあと、喜一はまだ朝食を済ませていないと言って、ミックスサンドを追加注文した。

喜一は口を動かしながらも昔の話をした。

そういえばそんなこともあったのだと思いつつ、和俊も自然と笑みを浮かべる。

喜一とは正午近くに別れ、和俊は今日も修造のお見舞いに行くことにした。

そして、いつものルートで公園へとやってきた。

鈴の音は聞こえてこなかった。

噂（後書き）

予定では次の作品も「無」シリーズで書くつもりです。

この回の話は、その第2作品の内容をこくわずかですが、取り込んでいます。

発狂

院内に入り、修造のもとへと足を運ぶ。

途中、ナースステーションで二人のナースが何やらもめ事をしていった。

一人は、三十代のナースでもう一人は、それより若い…二十代のナース。

もめ事というより、先輩が後輩に説教をしているように見えた。

ずっと下を向いたままの彼女を哀れみながら和俊は、その場を通り過ぎた。

廊下を歩いていると、ある一室の前に、白衣を着た男一人とナース数名が、なにやら立ち話をしていた。

やはり、何かあったのかと思い、修造の元へと急いだ。扉を開けると、修造はテレビを見ているところだった。

「よお。今日も来てくれたのか？」

「まあな。ところで…何かあったのか？」

「え？」

「いや…さつきさ、廊下で医者と看護婦さんが集まってたからさ…」

「…ああ、この階に入院してる患者がさ、突然発狂したんだよ。なんか…大事にしたたものを無くしてしまったとか言って、看護婦に飛び掛かったんだよ。全く子供の頭脳かと思ったけど、当の本人がガキだったからなんとも言えないんだけどな」

修造の言葉に和俊は、あることをふと思い出した。

「なあ、その子の入院してるとに、ちょっと行ってみないか？」

「え？」

「少し気になることがあつてさ」

「まあ…いいけど。今度は俺達に飛び掛かってくるかもしれないぜ？」

「ちょっと覗くだけ、長居はしないさ」

そして、少し不安げな修造を引き連れて、先ほど医師たちが集まっていた部屋の前へとやってきた。

ゆっくりと扉を開けて中の様子を確認してみると、その患者はベッドの上で横になってぐっすりと眠っていた。

「やっぱりな」

「何が？」

「この子さ…昨日、見舞いの帰りに俺にぶつかってきたんだよ。しかも、謝りもせずにさ…」

「ふーん。お前も随分なめられたもんだな」

「全くだ…」

その時、背後から扉の開く音が聞こえた。

見ると、白衣を着た男が部屋に入ってきた。

「ちよつと、君たち。勝手に入ってきてちゃ困るよ…って、修造くん？」

「ああ、なんだ先生じゃんか」

「また勝手に動いて…傷口が開いても知らないぞ」

「大丈夫だって。…つか、先生。この子供も担当してんの？」

「まあね」

「なんで、突然発狂なんかしたの？」

「いや…この子、今日検診日だったんだよ。で、この子いつも首飾りをしていただけで検診の邪魔になるから少しの間だけ外してくれないか頼んだんだけど…」

「頼むほど？」

「ああ、母親から貰った大事な代物らしくてね。肌身離さず持っていたんだよ。」

「…紛失してしまったと？」

「近いな。若い子が、間違っただけを捨ててしまったんだよ。だいぶ古ぼけてたからね」

和俊は、二人の会話を聞いて、なるほどそういうことだったのかと納得した。

これで、院内で出くわした全ての出来事のツジツマが合う。

「もしこの子が目を覚ました時、また発狂したりしたら…」

「それまでに取り戻すことができたらの話だけどねえ」

和俊は静かに眠っている少年の側に掛けられていた名前に目をやった。

『小室洋介』。

その少年の名だった。

「可哀想な子なんだよ、この子」

片桐医師が口を開き、そして続ける。

「今のところ、身寄りが親戚の叔母しかいないんだよ。両親は今の町を離れているみたいでね…」

「どうして？我が子が入院してるってのに…親心っていうのはないのかよ」

そう言うのと修造は腕組みをし、苛立ちの表情を浮かべた。

「うーん…ただ、彼女曰く、一向に連絡が取れないんだそうだ」

片桐医師も同じように腕組みをする。

その隣で和俊は、静かに眠っている洋介の顔をただジッと見つめていた。

この少年も入院した当時からずっと寂しい思いをしていたんだと思うと、ふいに幼少時代の自分を重ね合わせて思い出す。

若くして母親をこの病院で亡くし、父親とともに人生を再び歩み出したこと。

決して忘れてはならぬ忘れない一瞬だった。

「…俺、探してくるよその首飾り」

「えっ？」

二人は同時に和俊の方を向いた。

「この町に出たゴミは全て志間中央処理場に集められてる。そこの管理者にお願いすればなんとかなるかもしれない」

「でも…もう処理されてるかもしれないぞ？」

「大丈夫。作業形態はどうなっているのか、だいたいは分かっている。確か、この時間は分別作業だから、まだ間に合うはずだ」

「そうか…じゃあ、すまないけど、君にお願いするよ。彼が目覚めた時には…なんとか説得しておこう」

そう言って片桐医師は和俊の肩をポンッと叩いた。

和俊は頷き、部屋を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9018f/>

無～消えない想い～

2010年10月12日08時29分発行